

高等学校でのNIEタイム

小 学校・中学校に比べて、高等学校でのNIEタイムの実践はさほど多くありません。しかし実施している学校では、大きな成果を上げています。各地の高校で今まで行われてきた実践例の幾つかを紹介し（掲載に当たり、実践内容を簡略化したり整理したりまとめたりしましたので、該当校の実践そのものでないことをご理解ください）。

【実践例】

1 A高校での実践例「Manabee Morning」 （マナビー・モーニング）

- (1) 朝のHR（ホームルーム）での新聞活用。登校直後、短時間であっても心を落ち着けて文章を読む時間を取ることによって「前向きにがんばろう」という気持ちになってほしいと願っての活動である。
- (2) 主に「投書欄」や短めの「コラム」から、3分間で読み切ることができる長さのものを選ぶ。生徒の語彙力などを念頭に置き、旬の話題や学校行事と関連のある話題、生徒の成長を後押しできそうな話題を選ぶ。また、記事への橋渡しになるよう、毎回短い紹介文を添えて印刷している。
- (3) 記事選びは、主に「まなび支援部」の教師（3人）が担当する。各学年の教師も交代で提供するようにして偏りがないように留意している。教室では、担任が紹介文とは別な角度からひと言添えて生徒に配り、黙読する生徒の表情を見守ったり、時には一緒に読んだりしている。
- (4) 週に2回のペース。用紙はA4判の半分（A5判）に固定し、毎回ファイルに綴じるようにさせる。
- (5) 短い時間の中で「読むだけ」の活動であり、感想を書かせたり、発表したりはしないが、生徒からは「いい話だった」「自分でも新聞を読んでみようと思う」などの声が聞かれる。続けることによって、新聞を読むことに対する抵抗感が



和らぎ、生徒が少しずつ社会に目を向けるようになった。

2 B高校での実践例 「社説を読もう」

- (1) 進路指導部の教師が、新聞の社説をA4判の用紙に印刷する。3年の各学級担任がSHR（ショートホームルーム）時に生徒に配布。
- (2) 社説はネット配信されるので、フォーマットを作っておけば、簡単に印刷できる。
- (3) 読む読まないは、生徒に委ねられているが、全員に配布し、担任が配布時に一言添えることでより読まれるようになった。
- (4) 社会の動きに興味を持たせ、論述力を高める効果がある。

3 C高校での実践例 「NIEプロジェクト」

- (1) 週1回、朝礼時からLHR（ロングホームルーム）の時間にかけて全学年で実施。
- (2) 初期は、新聞社配信の「ワークシート」を利用していたが、順次、各学年の担当教員が、学年の実情に応じて、「記事をもとにしたワークシート」「コラムの書き写し」などを選んで実施し

ている。

- (3) 1年生は、タイムリーでレベルや内容も生徒の実態に合ったコラムや記事の「書き写し」を行っている。社会の出来事に幅広く関心を示すように工夫。生徒の書いた意見をまとめて配布しているクラスもある。
- (4) 2年生では、社会科の教師がオリジナルの「ワークシート」を作成し、全クラスに配布している。質問項目を工夫。教員が検印だけでなく、生徒の書いたコメントにラインを引いたり一言添えたりすると、次の意欲につながっていく。生徒の興味関心に差があることに対応することや、生徒がお互いにコメントを交流し合うことなどができるとよい。
- (5) 3年生では、入試面接や小論文対策に役立つ情報の収集に当てている。受験を間近にした高3の時期として、無理なく受験にも即利用できるような内容を心がけている。

4 D高校での実践例 「朝学習NIE」

- (1) 全学年全クラスが、1時間目の授業が始まる前の15分間(8:30~8:45)で実施。週に2回、あとは担任の裁量に任されている。
- (2) 国語科の教員が中心になって新聞社発行の「コラムノート」(記入欄1000字)を利用し、「要約」と「自分の考え」を書く小論文指導(文章指導)として行っている。
- (3) 取り上げる新聞記事は、各紙をバランスよく選ぶようにしている。学年やコースの特色を考慮しながら内容を選んでいる。
- (4) 週末の朝学習の時間に、課題の新聞記事を配布し、教員が解説。「週末課題」として生徒は土・日にノートに記入し、翌週の月曜か火曜の「朝学習NIE」の時間に発表してディスカッションする、という流れになっている。
- (5) コースによっては、これを「朝学習」でなく授業の中で行っているところもある。
- (6) 新聞記事を読み、考え、書くことで、読む力・書く力はもちろん語彙力・表現力が養われる。この取り組みによって、模試における国語の読解力の向上や小論文試験・面接試験での効果が期待されている。

5 E高校での実践例 「この記事に注目！」

- (1) 時間帯は、朝・昼・帰りのSHRのどれかを利用する。
- (2) 日直が日誌に、自分が読んで紹介したい記事の要約を書き、意見文を記入。
- (3) 記事のコピーまたは切り抜きを教室後ろの黒板に掲示する。
- (4) 記事は3日間掲示し、その後はNIE用ノートに貼付。
- (5) 記事の要約を、SHRで紹介することもある。
- (6) 新聞は家庭で読まれる一般紙に限定する。
- (7) 各学級で1紙購読。月ごとに新聞を変えることもある。費用は学校徴収金(家庭負担)。
- (8) ねらいと期待される効果
 - ①新聞の情報の広さ、奥深さ、思索へのつながりなどを知る。
 - ②級友の思考や表現力、判断力を学びあう契機となり相互の知的刺激を生む。
 - ③スマホだけでない新聞を通じた人間関係の改善や深まりにつながり、友人との視点の相違を学びながら、情報の選択のあり方を考えられる。
 - ④担任にとって、HR指導の幅の広がりになり、生徒は達成感を得て自己肯定感や自尊感情をもつことが期待できる。



6 F高校での実践例 「新聞を読む」

(1) 全学年で

登校～始業前の時間帯に、自主的に6紙の1面を比較読みさせる。担当教員が、毎朝、当日の新聞の第1面をコピーし、生徒昇降口に並べて張り出す。生徒の目に必ず触れる場所なので、生徒の興味をひくことができる。生徒たちがニュースについて話し合うきっかけになる。

(2) 校長の「NIE 掲示板」

昇降口と教室入り口付近の2か所に「NIE コーナー」を設け、校長が生徒に読んでほしい記事を随時掲示する。記事にはナンバーをつけておく。生徒は、その記事の中から週に一つを選び、指定のコメント用紙に、選んだ理由、自分の意見を書いて、現代文担当者に提出。担当者は点検後、校長に渡す。学校長から返事が来ることもある。生徒は校長とつながっていることが実感できる。担当教員も校長との連携やコミュニケーションがとれる。

(3) 2年生「今日のニュース」

週に1、2回、朝のSHRで行っている。家庭で新聞を購読していない場合もあるので、学年で1紙を購読。朝夕刊をクラス順に1部ずつ配置する（毎日2クラス、5日に1回以上まわってくる）。担任が教室に持っていき、気にな



る記事をひとこと紹介して教卓に置く。生徒は自由に新聞を手にとって読むことができる。担任が積極的に記事をコピーして掲示したり、授業やHRで話題にしたりすることもある。ねらいは、社会に向ける関心を養うことと、小論文・面接対策。週1～2回だと、新聞が多すぎるということがなく、整理しやすい。

(4) 理系クラス「新聞を読む」

現代文の授業のある日の朝のSHRでB4判のプリントを配布する。もらったプリントを読み、意見を書いて授業で提出。点検して次の授業で返却。記事を読むときに、なるほどと思ったところに青線、ちがうのではと思ったところには赤線を引く。授業時間数の少ない理系で、速読や書く力を養う。意見を書く分量は、1年間でかなり増え、内容も根拠のあるしっかりしたものになってくる。

7 G高校での実践例 「政経の授業時に新聞活用」

- (1) 授業の冒頭で教師が政治経済に関係する新聞記事を紹介する。口頭で行うときも、印刷して配布し解説するときもある。
- (2) 各自スクラップノートを作成、スクラップした記事について意見等を記述。週に1回は提出。良いものについて、授業の冒頭に紹介したり、掲示したり、ときには印刷して配布したりする。

8 H高校での実践例 「生物の授業時に新聞活用」

- (1) 生徒に伝えたい「生物と関連する記事」があるとき、授業の最初に活用する。機械的に毎回使うわけではない。なぜこの記事を選び紹介したいのかを説明することで、生徒にはこちらの気持ちが伝わり取り組みへの意欲が高まる。元々教科書を使用して学ぶこと以外の時間がないので、臨機応変に扱う。

- ①記事は、1面・科学欄・家庭欄・社説・コラム・書評等、必要に応じて何でも使用する。
- ②解説欄はその説明や関連事項のこれまでの流れを活用し、1面ではニュース性のインパクトを伝える。
- ③教科書との関連は次の2通り。

- i) 前もって保存しておいた記事を関連する単元で活用する
- ii) 最新記事の活用では、まだ教えていない単元でも「数日前の新聞で伝えられた」というインパクトを重視してひとまず起きていることを予習的に紹介し、単元を教えるときにさらに原理も含めて学ばせる。

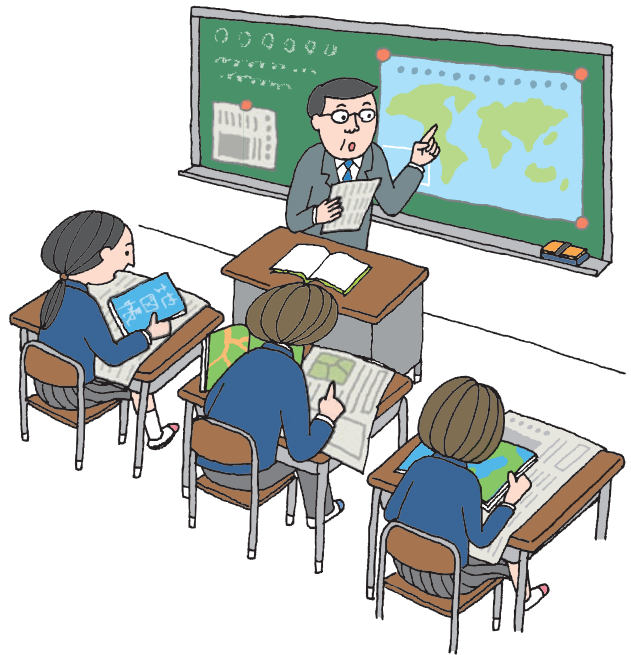
④具体的な展開

- i) 全員に記事のコピーを配布し、「2分あげるから記事を読みなさい。後で当てて何が書いてあったかを聞くので。読みながらポイントに線を引くと答えやすい」と伝え、時計を見て「始め」「止め」の合図をすると集中して読む。生徒の状況を見て時間は調整する。場合によっては、「まだ読み終わっていない人は？」と手をあげさせ、「では30秒あげるから」と言って追い込む。
- ii) 大事なのは正解かどうかではなく、記事を読み、考えたことである。何人かに当てると、ポイントはある程度揃う。答えられない場合も「何か分かったことを教えて」と言って巻き込む。最後に解説を行う。教科書とつなげられる場合は少し詳しく説明し、世の中で起きていることと教科書が関連していること、教科書のことを分かった世の中のことも理解しやすくなることを具体的に伝える。
- iii) 関連記事が続けて報道される場合もある。このときは授業で記事をシリーズとして使っていく、前の記事と次の記事の内容の違いも伝え、生徒は思わずその変遷に目を向ける。

(2) 教科担当者としての進路指導

教科を担当しているクラスの生徒で生物関係（看護医療・農学・理学・薬学他）の希望者に対して、内容的に関連する記事を見つけたらコピーを取り、授業時に個人的にその生徒に渡す。

- ①前もって趣旨を伝えておく。「今その学問分野ではこんな研究が行われている、こんなことが問題になっている、こんな興味深いことが見つかった、などの記事があったらその都度渡すようにしたい。もしほしい人がいたら申し出れば記事を渡そう」



これで教科書だけの授業から、世の中や進路ともつながる視点を生徒に伝えることができる。「何を学びに大学へ行くのか」を教科の立場でサポートする。

※これは生物の内容として行うのだが、結果として面接や小論文の内容が生徒の頭の中で構築されることにつながる。直前の付け焼刃ではなくなる。生徒は興味を持てばその方面に進学したいと思い、自ら勉強するものだ。教科担当者にしかできない進路指導である。

9 | 高校での実践例
「地理の授業時間にNIEタイム」

- (1) 4単位ある地理の授業時間の冒頭5~10分間を「NIEタイム」に当てる。
- (2) いろいろな方法で集めた新聞を生徒数分用意し、社会科教室後方の机の上に並べておく。生徒はここから自由に持って行き、終わったら元に戻る。
- (3) 自宅で新聞を購読していても、自ら読むという子はほとんどいない状況なので、最初の授業で「新聞ガイダンス」を行う。紙面に登場する人名や地名に○を付けたり、掲載写真に短いコメントを付け発表させたりする。
- (4) 次の時間からは、各面の内容を紹介しながら、自分が興味を持った記事を読ませる。大きな事件があったときなどは、教師の解説も入れる。

生徒はいろいろな地域から通ってきているので、地域版や版建てによって内容が違うことを知ることによって、新聞情報の地域性を学ばせることにもなる。

- (5) 慣れてきたら、地形・気候・資源・災害・民族・宗教など系統的地理学習の内容(テーマ)に関連する記事を探させるようにする。記事の見出しを書き写し、キーワードを見つけ、教科書との関連(単元名とページ)をメモすることから始める。例えば、「フィリピンにおける台風の被害」の記事を選んだときは、教科書の「気候環境」や「自然災害」の単元との関連を見つけるとともに、「国際協力」の単元での日本の災害支援との関連性を見いだす生徒もいる。
- (6) 市町村規模の地誌学習では、全国紙の地方版や地元紙を読むようにする。また、修学旅行前後に旅行先の地元紙を取り寄せたり、現地で買ったり、ウェブ版で読んだりして、事前学習で調べたことや現地で見聞きしたことと関連づけてとらえることができる。
- (7) 世界地誌学習においても、国際的なニュースを通して、「宗教」「民族」「国家・領域・国境」など系統的地理学習項目との関連に気づくことができる。
- (8) 生徒からは、「学習に関係する記事が意外に多いことに気づいた」「先生の解説があると理解が深まる」「地理の教科書と新聞記事が関係していることが理解できた」「これから学ぶ公民ではもっと関連がありそうだ」「家では新聞を

読む時間がないので授業で読むことができよかった」などの感想が寄せられた。

10 J中高一貫校での実践例「よりよく世界を知り、考え、そして行動する」

- (1) 「新聞から拾った私の意見」
朝礼の時間に新聞から題材を取り、そこから自分の意見を必ず入れて名簿順に1分間スピーチをする。朝礼があるたびに継続。切り抜いた新聞記事と自分の意見を書いた用紙を教室後ろの白いカレンダーの裏紙に日々蓄積し、発表後も学級の皆で振り返ってみることができるようにする。世の中のいろいろな動き・情勢が分かり、生徒おのこの個性や主張が明確になり、交流しあう良い機会となる。
- (2) 「新聞切り抜きご意見番」「新聞切り抜き調査隊」
各自スクラップブックをつくり、日々自分の好きな記事について切り抜きを行う。自分の意見を書いたり、時間の許す者は調べ学習をしたことをまとめたりして各自の都合のよいときに提出。担当教師がコメントを書いて返却する。自主的活動なので、毎日出す生徒もいる一方で、ほとんど出さない生徒もいる。教師の日々の負担はあるが、きちんと取り組んだ生徒の文章力の上達度や興味関心の広がり大きい。自分のペースでできる、自分一人だけでなく他の人の考えを見聞きするなどでつながり、継続性が出てくる。